

教育研究研修センターだより



通巻 No.280

令和4年11月15日(火)発行

私の心に響いた言葉

岡山市国公立園長会 会長

岡山市立平井幼稚園 園長 中山 浩子

私が新採用教諭として配属された幼稚園は、園長先生が全国国公立幼稚園教育研究会の会長をされていたこともあり、県内外からいろいろな先生方が保育の見学に来られていました。その当時、教育課程編成表の他に子どもの姿を8つの視点から捉えた園独自の発達の指標を作っており、それは“主体的な子ども”を育てるためのものであったと記憶しています。その指標を基に、園長先生が園の教育について説明されていましたが、私は“主体的”をどのように捉え、選んだ遊びをどのように展開していくのか分からず、悩んでは先輩の先生方に相談しいろいろ教えていただいていた。

そんな時、東京から視察に来られた方が「人参を餌にすれば、馬を水場に連れて行くことはできる。でも、水を飲ませることはできないでしょ。水を飲み込むのは馬の意志だから。馬が自分で水を飲みたいくなるようにするのが私たちの仕事。それが援助よ。」と話されました。その話は、その頃の私にとっては分かりやすく、子どもが主体的に遊ぶためには、子どもの興味を捉え、環境を準備することが大切であるということを理解するための魔法の言葉となりました。

そして最近、日本競馬会における最高の調教師と言われている藤沢和雄氏の「Happy People Make Happy Horse」という言葉に出会いました。藤沢氏は、若い頃「馬の走りたくなる気持ちを最優先に考えて調教していくこと」を競馬の本場であるイギリスの調教師から学んだそうです。

ここで肝心なのは、幸せな人間が幸せな馬を作ることと馬の主体性を尊重するということです。この言葉は、あと数年で定年を迎える私の心に響きました。職場の先生たちが、子どものことを第一に考え、子ども一人一人の良さに気付き、子どもを尊重して笑顔で関わっている姿を見ると、この仕事をしていた本当に良かったと思うことができるのは、そういうことだったのだと改めて思いました。

私たちは、子どもの人生のほんの数年に携わっているだけにもかかわらず、つい課題を見付け「できる」「できない」で子どもを見てしまいがちになってはいないでしょうか。幸せな人生とは、社会の中のその人が得意とする分野で、生き生きと役割を果たしながら生きていくことではないでしょうか。

幼稚園教育要領に示された幼児期に育みたい資質・能力は、子どもたちが主体的に学び合うことで育まれるものとされています。そして子どもは、初めての集団生活となる幼児教育の場で、先生たちに守られているという安心感から生じる安定した情緒が支えとなって、次第に自分の世界を拡大し、自立する子どもへと育っていくのだと思います。

馬は、爪や角、牙を持たないため、本来は戦うのではなく助け合って生きる動物だそうです。それなら人間も同じ。“Horse”を“Child”に置き換え、「Happy People Make Happy Child」これもまた然り。社会の急速な変化に伴い、子どもを取り巻く状況や教育課題は変わっていきます。しかし、私たち自身が子どもに関わることを楽しみ、子どもの行動に温かい関心を寄せ、心の動きに応答しながら共に考えていく“支援者”であり“応援団”であることは、変わらない、忘れてはならないことだと思います。

GIGA スクール構想の実現に向けて ～授業におけるICT機器等の活用について～

情報教育推進室

出前講座等

ICT活用の活用に関連した校内研修

GIGA スクール構想2年目を迎え、1人1台端末の活用を通して見えてきた具体的な課題や活用スキル等の必要性から、各学校ではICT活用に関連した校内研修の充実が進められています。情報教育推進室が出向いた校内研修の一例を紹介します。

〈端末を使った演習の様子〉



〈講義の様子〉

《 蛍明小学校 (R4.6.3) 》

- ICT活用による児童に育成する力について
 - ・体系表を生かした情報活用能力の育成
 - ・教育大綱「育む5つの力」との関連
- 授業での活用について
 - ・自分の考えをもたせる実践例とポイント
 - ・自分の考えを広げる・練り上げる実践例とポイント
 - ・自分の考えを伝える実践例とポイント



授業場面ごとの有効なICTの活用について、受講した先生たちが児童の立場で演習をしたことで、実践的なイメージにつながり、研修後は多くの授業でICTを活用するようになりました。

南区小学校長会研修会 (R4.6.23)

夏休みの端末持ち帰りに向けて、南区の小学校の校長先生が集まり、研修を実施しました。一学期中にどんな力を子どもたちに付けておくべきか、そのためにどんな取組が有効であるか、また、持ち帰ってどんな活用が現実的で効果的なのかについて、情報教育推進室から実践例を紹介しました。また、すららネットから「すららドリル」に関する演習をしました。



〈演習・講義の様子〉

Google 社との連携

岡山市は、「Google for Education」のパートナー自治体への参画により、Google社と連携して下記の取組を行っています。

○パートナー自治体のみが受講できる研修プログラム

Google社から講師を招いた研修の実施が可能となりました。このことにより、教育研究研修センターが実施する研修講座や出前講座に加え、1人1台端末のさらなる活用に向けた研修機会が増えています。



〈Google社による研修の様子〉

○GIGA スクール構想保護者向け 体験セミナー

(R4.8.9-10)

Google社から講師を招き、国の動向や児童生徒が使用している端末やアプリケーションに関する理解を深め、GIGA スクール構想2 スクール構想への啓発を進めました。

〈参加者の感想〉

- GIGA スクール構想とは何なのか分からなかったが、全体像を感じられるように思う。
- 今日の体験を通して、自分の思い込みを恥ずかしく思う。自分が遊びに使っているから、子どももそうに違いないと歪んだ見方をしていました。
- 挙手して当てられた人だけが自分の意見を発表すると、挙手しない人の意見は消えてしまう。みんながそれぞれの意見を自由に発信できるのが楽しそうです。

○岡山市ジュニアICTリーダー

(OKA-JIL) プロジェクト (R4.11.27 開催予定)

「Society5.0 時代」が到来する中で、一人一人の児童生徒が、自分のよさや可能性を知り、持続可能な社会の創り手となることができるよう、情報活用能力(情報モラル含む)を育むことを目的としています。

また、今後の岡山市のICTを活用した取組の中心となる児童生徒の育成を目指します。興味や関心のある児童生徒が自分を輝かし、周囲に貢献する存在に成長することを期待します。

(令和4年10月24日付け岡教研セ第334号で各校に案内をしています)

『インクルーシブ教育 を実現するための 校内支援体制づくり』

合同開催

小・中学校長研修講座
新任特別支援教育コーディネーター研修講座
特別支援教育コーディネーター研修講座
特別支援学級担当教員研修講座
生徒指導担当者研修講座



岡山市教育研究研修センターでは、担当している職務の遂行に必要な知識技能等の習得や向上をねらいとした職能研修を実施しています。

特別支援教育に関わる職能研修では、例年それぞれの担当者から「教職員間で子どもへの関わりにズレが生じている。」「校内のより多くの教職員と一緒に聞きたかった。」「管理職や通常の学級の先生にも知ってほしい。」等の意見をいただいています。

そこで、岡山市立小・中・義務教育学校における特別支援教育の目標である「すべての教職員で行う特別支援教育の推進～インクルーシブ教育システムの構築～」の実現のために、校内の様々な立場の先生がともに学ぶ研修講座を実施しました。



ノートルダム清心女子大学
青山 新吾 准教授



【協議の様子】

講師の青山新吾准教授の講義からは、支援の前に人としてのつきあいを意識すること、児童生徒の言動に対してまなざしを向け児童生徒の言動の背景要因を探ることが大切であることについて学びました。

グループ協議では、それぞれの立場から自校の特別支援教育の現状や課題を出し合い、2学期以降の具体的な取組について協議を行いました。

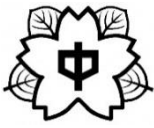
特別支援学級担任や特別支援教育コーディネーターの立場からは、特別支援の視点を取り入れた児童生徒の見方や捉え方について、校内の全教職員で情報共有を常に行うことの

大切さを学びました。また、特別支援学級、通常の学級に関わらず、教室の環境整備や教材・教具の工夫等が大事だということを再確認し、今後の実践につながるヒントを得ることができました。

教育研究研修センターは、この研修講座が「インクルーシブ教育の実現に向けた校内支援体制の充実」の一助になればと願っています。

＜受講者の感想＞

- 校長先生や生徒指導の先生、コーディネーターと一緒に自校の具体的な実態をあげたり、これからできることを話し合ったりしたことで、実践できる可能性が大いに高まった。2学期から、特別支援学級担任として、特別支援学級の子どもたちにとってよりよい交流の仕方を考えて改善していきたい。(特別支援学級担当教員)
- 特別支援教育コーディネーターとして、特別支援の知識や情報を他の教職員がどれだけ知っているのか疑問だった。他の担当者と一緒に研修をすることができて、特別支援学級担任の思いも共有できたことが良かった。自校の抱えている課題やカリキュラムなどの制度的な問題についても気付くことができた。インクルーシブ教育への第一歩として、先生方を繋ぐ役割を果たしたいと思った。(特別支援教育コーディネーター)



「自学」に向かう生徒の育成 を目指した校内研修の取組

岡山市立岡北中学校

1 はじめに

本校の生徒数は403名で、通常学級は各学年4クラスずつの中規模校である。生徒は、気持ちの良い挨拶、靴をそろえること、時間前行動等、おおむね基本的な習慣が身に付いており、授業も落ち着いて受けることができている。教育活動は、校訓の「自学 友情 健康」の下に進め、授業では「専門教科の面白さに気付き、自ら学びに向かう」生徒の育成を目指している。

2 職員間の共通理解

「第3期岡山市教育振興基本計画」や「第2期岡山市教育大綱」の策定を踏まえ、教育に関する総合調査（学校独自項目）の見直しを全職員で行い、調査項目を精査した。授業に関わる項目も絞ることで、目指す方向について考え、確認していく機会となった。

3 校内研修①（若手教員中心）

教育研究研修センター「OJT若手教員育成支援プロジェクト」（年間5回）の活用

(1) 計画

- ・2年目・3年目の教諭と常勤講師（計5名）は、メンターに協力してもらい、各1回の公開授業を行う。
- ・授業2週間前に、5名に加え、メンター、研究主任、当該学年の主任による事前検討会を行う。検討会までに、メンター他同僚との相談、教科会を経ておく。
- ・協議会では、「次回につながる課題」を明確にし、共有することで、全員が少しずつスパイラルアップできるようにする。

(2) 実践

第1回6/14(火)3年国語科「俳句を味わう」

第1回では、独創的な考えができるような「めあて」を提示し、生徒が活発に活動できた。さらに、机間指導により一人一人の良い考えを見つけ、称揚につなげたいということから、次回の課題を「褒める授業」とした。

第2回7/12(火)1年数学科「文字の式」

第2回では、教師からの称揚だけでなく生徒同士でも褒める場面があり、概して課題は達成できた。さらに、平生の授業では活躍できにくい生徒に着目して褒めることができればよかったということから、次回（10/25）の課題を「普段、活躍の少ない生徒を褒める授業」とした。



▲第1回公開授業の様子 事前検討に関わった先生だけでなく、多くの先生が参観した。

4 校内研修②（全教職員への広がり）

岡北中学校区の公開授業（11/16）の計画

前述のOJT若手教員育成支援プロジェクトと同様の枠組みで、例年行われている上記公開授業を実施する。具体的には、各学年1名の代表授業（計3名）とし、多様なグループでの事前検討（教科会・学年会等）を行って当日を迎える。協議会では、来年度「まなプロ」3年目の「代表授業で扱う課題」を決める。また、一貫性のある研究にしておくために、同じ大学教授に複数年で助言をいただくこととした。

5 おわりに

今年度の前半に実施した2度のOJT公開授業は、事前に多くの先生が学習指導案検討に関わり「専門教科の面白さ」に触れる魅力ある授業ができた。また、協議会で提起された「褒める授業」を意識することにより、生徒は授業での活躍が保証され、ひいては内発的な学習意欲「自学」へつながると考えている。

しかしながら、授業は複雑な要素が絡み合い奥深い。今回紹介したようなオーソドックスな取組を、気持ちを入れながら繰り返すことが授業力向上の近道に思える。これからも教職員が力を合わせ、少しでも質の高い魅力ある授業を創り出し、生徒一人一人が「自ら学びに向かう」よう支援していきたい。